

コロナ禍の孤獨

赤谷慶子

四月下旬に若き友人米國より歸國せり。その友人の九十四歳の祖父體調不良にて入院しをり。さを憂ふるがゆるゑの歸國なり。この若き我友人は頭腦明晰にて全米屈指の知的水準を誇るスワースモア大學を経てペンシルベニア大學より修士號を取得せるのち、博士課程に在籍する婚約者通ふジョンズホプキンス大學に就職せり。正にコロナ集計及び分析を行ふ部署の擔當なり。歸國して後は實家に滞在し、我家の近隣なれば歸國挨拶に訪れたり。二時間ほど睦まじく語り合ひて、職務にかかはるによりて仔細を披露するはためらひあれど、一つ、おのれの感じたりし事、分析結果に表出すと言ふを聞きて、納得する所あり。そはコロナ禍において遠隔のいとなみ多方面に行はれたれど、對面の交信激減し、人々は孤獨なる日々を過ごせり。この孤獨感により、記憶力退化すといふ分析なりき。それがしも七十臺に突入しをり、當然記憶力の低下は免れず。しかれども、記憶力には自信あれば、近頃物覚え悪しと覺ゆ。かかる事も原因の一つと思ひつつ安堵するを得や否や、心許なし。

(令和四年四月二十三日受附)